

副詞の類義語分析

李 澤 熊

キーワード: 副詞、類義語、認知言語学、ベース、プロファイル

1. はじめに

本稿では、類義関係にある副詞を考察対象とし、認知言語学の枠組みから、相互の意味の類似点・相違点を明らかにする。考察対象とする語は、非意図的であることを表す副詞「いつしか」「知らず知らず」「いつの間にか」の3語である。

ここで、本稿の構成について簡単に述べておく。

まず、2. では本稿で考察対象とする語の類似点・相違点を明らかにする前提として、初山（2005）を取りあげる。初山（2005）の研究は類義表現を認知言語学的観点から定義・分類したものである。

次に3. では「いつしか」「知らず知らず」「いつの間にか」を比較し、それぞれの個別の意味と相互の意味の類似点・相違点を明らかにする。

最後の4. は本稿のまとめである。

2. 前提となる理論

分析に入る前に、本節では、考察対象とする語の類似点・相違点を明らかにする前提として、初山（2005）を取りあげる。

初山（2005: 579–583）の研究は、類義表現の意味の異なりの諸相を、認知言語学の枠組みから明らかにしたものである。以下、その内容を概観する。

まず、類義表現（類義語・類義句・類義文を含む）をプロトタイプカテゴリー（注1）と考え、プロトタイプの類義表現を「指示対象・指示範囲（プロファイル）が同一である複数の表現（プロトタイプの類義文: 真理条件的意味が同一である複数の文）」と定義し、次のような例をあげている。

例) あした／みょうにち、盲腸（炎）／虫垂炎

花子が太郎をなぐった。／太郎が花子になぐられた。

また、「この定義に基づけば、類義表現の意味の違いは、必然的に、同一の事物・事態に対して異なる捉え方・解釈 (construal) をすることができるという人間が有する認知能力に還元できることになる」としている。

さらに、プロトタイプから拡張した (非プロトタイプの) 類義表現を次のように定義している。

類義表現: 同一の対象を示しうる (指す場合がある) 複数の表現

例) 動物／犬、木／松 [上位語と下位語の関係]

門のところに誰かいる。／門の前に怪しい男が立っている。[描写の精密さの異なる文]

この花は日本語で「サクラ」と言う／呼ぶ。[一方の語(句)の複数の意味のうちの1つが、他方の語の意味 (の1つ) と同一]

初山 (2005) は、以上の事物・事態に対する様々な捉え方 (の違い) の観点から、類義表現を大きく10に分類している。例えば、「プロファイルは同一であるが、ベースは異なる」ものとして「land [↔ sea] / ground [↔ air]、陸上 [↔ 海上] / 地上 [↔ 空中・地下]」、「視点の違う」ものとして「shore [視点が水上] / coast [視点が陸上]、Aさんが名古屋から東京に行った。／Aさんが名古屋から東京に来た。」などがあげられる。

以下では、非意図的であることを表す副詞「いつしか」「知らず知らず」「いつの間にか」の3語を、初山 (2005) が提案している「類義表現の定義・分類」に従って、分析を行う。その中で、本稿で考察対象とする語は初山 (2005) で分類されている類義表現のタイプの中で「ベースは同一であるが、プロファイルが異なる」ものであるということ を明らかにする (注2)。

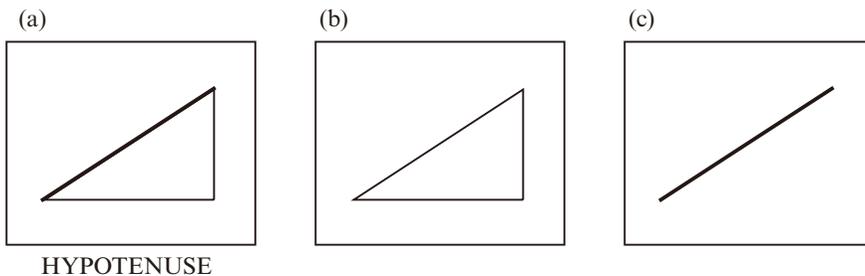
それでは、ここで本稿で用いる「ベース (base)」と「プロファイル (profile)」という用語について簡略に説明する。これらは Langacker (1987,1988) の用語で、辻 (2002) は、次のように解説している。

認知文法は、百科事典的意味論の立場をとり、ことばの意味は複数の認知領域において記述される。ある特定の認知領域においても、全ての構造が等しく扱われるのではなく、焦点化され、際だちの大きいプロファイルと呼ばれる部分と、そのプロファイルの背景的要素として機能するベースに分かれる。

例えば、直角三角形の「斜辺」という表現の意味記述においては、空間という認知領域における形状が最も重要である。この領域において、想起される概念内容の全体、す

なわち直角三角形の形状全体がベースとなる。というのは、「斜辺」の意味を規定する場合には、1本の直線のみを想起するだけでは不十分であり、直角三角形という3本の直線からなる形状全体が概念化されなければならないからである。しかし、「斜辺」ということは、当然この形状全体を指し示すわけではない。言語使用者は、この形状全体を心に思い浮かべたうえで、その部分構造である斜めの直線に注目し、その部分のみに言及する場合の表現が「斜辺」である。このように、特定の言語表現が直接指し示す部分をプロフィールと呼ぶ。(p.236、下線は引用者)

〈図1〉 Langacker (1988: 59)



3. 「いつしか」「知らず知らず」「いつの間にか」の意味分析 (注3)

3.1. 3語の共通点 (同一のベース)

まず、「いつしか」「知らず知らず」「いつの間にか」の3語が類義関係にあることを以下の例に基づき、確認する。

- (1) 協定書によると、和興開発は用地買収を担当、資金は東急建設の連帯保証で紀陽銀行が融資し、東急建設は実際の開発工事を受注する。融資の上限が明記されておらず当初の百億—二百億円がいつしか (いつの間にか) 五百億円に膨れ上がっている。(毎日新聞：1993.9.21 夕刊)
- (2) 加藤をとりこにして、ここまでつれて来た同期生たちはいつの間にか (いつしか)、六人が五人に減り、五人が四人に減っていた。(新田次郎『孤高の人』：420)

まず、例(1)と例(2)は「いつしか」を「いつの間にか」で、「いつの間にか」を「いつしか」でそれぞれ言い換えても文の持つ意味はほとんど変わらない。つまり、両方ともに「いつ当初の百億—二百億円から五百億円に変わった(膨れ上がった)のかわからない(例(1))」、「同期生たちがいつから六人が五人に減り、五人が四人に減っていた

のわからない(例(2))」というように解釈することができる。

このことから、「いつしか」と「いつの間にか」は「話し手がある事柄の変化に気づかない」ことを表すという共通点を持っていると考えられる。

続いて、次の例を見てみよう。

- (3) 私は、ベッドに入った後も、自分なりにこの問題について考えてみようとしたが、テニスによる疲れと、ワインの心地好い酔いの助けもあって、いつのまにか(知らず知らず)眠り込んでしまった。

(http://www.provision-unet.ocn.ne.jp/work/aki_disk/aki_disk2.html)

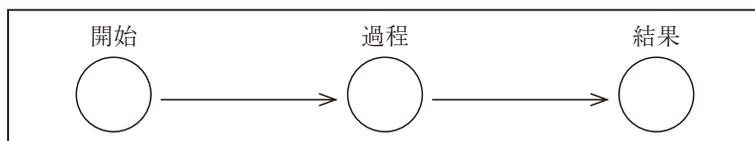
例(3)は「いつの間にか」を「知らず知らず」に置き換えられる。例(3)は、概略「テニスによる疲れと、ワインの心地好い酔いの助けもあって、この問題について考えているうちに、自分も気がつかないうちに、眠り込んでしまった」というようにとらえることができる。つまり、両語はともに「話し手が気がつかないうちに、何らかの変化が起こる」ことを表すという共通点を持っていると言える。言い換えれば、「話し手がある事柄の変化に気づかない」ということになる。

以上のことから、「いつしか」「いつの間にか」「知らず知らず」の3語は「話し手がある事柄の変化に気づかない」という共通点を持っていることがわかる。

ここで「ある事柄の変化」を〈図2〉のように示した場合、3語は一連の変化に気づいていないという共通のベースを持つことになる。

〈図2〉(同一のベース)

〈事柄の変化〉



3.2. 「いつの間にか」と「いつしか」

本節では、「いつの間にか」と「いつしか」を比較し、相互の意味の類似点・相違点を明らかにする。まず、「いつの間にか」についての例を見てみよう。

- (4) 私は床の上に腹這いになり、頬を床につけていた。水がしたたってくる方を仰ぐと、手の届きそうなかさに黒い天井があり、私はいつのまにかテーブルの下にいることを知った。(三浦哲郎『忍ぶ川』:568)

- (5) しかし何処まで行っても、その林は尽きず、それにまた雪雲らしいものがその林の上に拡がり出してきたので、私はそれ以上奥へはいることを断念して途中から引返して来た。が、どうも道を間違えたらしく、いつのまにか私は自分自身の足跡をも見失っていた。(堀辰雄『風立ちぬ・美しい村』：333)

以上の例からわかるように、話し手は「テーブルの下にいる」、「自分自身の足跡をも見失っていた」という自分のおかれた状況について、「そうなるまでのプロセスを覚えていない」と言える。例えば、例(4)の場合「私は気がついたら、テーブルの下にいた。つまり、どうやってテーブルの下に入ってきたか覚えていない」というように読みとることができる。また、例(5)の場合は、「林のきれいな景色に見とれて林の中へはいついき、雪雲らしいものがその林の上に拡がり出してきたので戻ろうとし、気がついたら道に迷っていた。つまり、どうやって道に迷うに至ったか覚えていない」と言える。

以上のことから、「いつの間にか」の意味は〈話し手によって〉〈主体が〉〈気づかないうちに〉〈ある出来事や状態が変化していた〉〈ととらえられる〉ことを表すと記述することができる。

続いて、「いつしか」を取りあげる。

- (6) 鈍行の夜行列車で一人旅をするのが好きだった私にとって、よく見慣れた懐かしい風景のようだった。“甘たるきニスの臭い”でも加われば、朔太郎の“夜汽車”そのものではないかと思ったりもした。しばらくの間、人々を興味深く眺めていたが、期待と不安の渦巻いていた私にとって、この風景は、あまりにもゆったりとのどかだったせいか、いつしか (??いつの間にか) ひどく場違いなものに思えてきた。(藤原正彦『若き数学者のアメリカ』：8)
- (7) 三口ほど飲むと、かなり気持が落ち着いてきた。彼はふたたび蒲団にもぐり、小さな軀をちぢこめ、じっと目をつぶった。やがて、猛威をたくましくしていた下田の婆やの軀は少しずつ静まってゆき、それと共に、隣に丸くなっている男の子の薄く開かれた口からも、いつしか (??いつの間にか) 低い気弱そうな寝息が洩れはじめた。(沢木耕太郎『一瞬の夏』：698)
- (8) 夫からの送金が途絶え、夫のいるシンガポール陥落のニュースが伝わる。職のないデージーは頼み込んでバンドでピアノを弾かせてもらう。断られてもしつこく押し掛けるデージーの熱意にトロンボーン奏者のマックス(ルーク・ライリー)は、いつしか (??いつの間にか) 好意を抱き、後押しするようになる。(毎日新聞：1991.9.4夕刊)

以上の例において、「ひどく場違いなものに思えてきた」、「低い気弱そうな寝息が洩れはじめた」、「好意を抱き、後押しするようになる」という事柄は、話し手によって、「それがいつからそうなったかわからない」というようにとらえることができる。また、その事柄は「ある程度時間が経過するとともにそうなった」ということになる。つまり、例(6)の場合は、「この風景を眺めているうちに、ひどく場違いなものに思えてきたが、それがいつからそのように思えてきたかわからない」というようにとらえることができる。

また、例(7)の場合は、「蒲団にもぐり、小さな軀をちぢこめ、じっと目をつぶっているうちに、男の子の薄く開かれた口から低い気弱そうな寝息が洩れはじめたが、それがいつからかわからない」ということになる。さらに、例(8)の場合は、「断られてもしつこく押し掛けてくるデイジーに好意を抱き、後押しするようになったが、それがいつからそうなったかわからない」というように読みとることができる。

以上のことから、「いつしか」の意味は〈話し手によって〉〈主体が〉〈ある出来事や状態の〉〈変化のはじまりに気づいていない〉〈ととらえられる〉ことを表すと記述できる。

それではここで、「いつの間にか」と「いつしか」の意味の相違点(プロフィールの違い)について検討する。

以下の例は「いつの間にか」を「いつしか」で言い換えることができない。

- (9) いつの間にか (*いつしか) 幼なじみの友達が結婚していた。
- (10) いつの間にか (*いつしか) 彼女の名字が山田に変わっていた。
- (11) しかし、ずっと歳もゆかぬ子供たちの上に現われる変化は、誰の目にもこれとわかる。子供なんて裏の崖に生える竹藪の筍みたいなものだ。それはずんずんと大きくなる。ごく短期間と思うまに、あれあれという間に成長する。たとえば基一郎のあとに残された大人たちが、幾枚かの証文に、借金に、利息に苦しんでいたときに生れた生粋の昭和っ子の周二が、いつのまにか (*いつしか) もう小学生なのだ。(北杜夫『楡家の人びと』：848)

上でも説明したように、「いつしか」は〈話し手によって〉〈主体が〉〈ある出来事や状態の〉〈変化のはじまりに気づいていない〉〈ととらえられる〉ことを表す場合に用いられる。従って、話し手自身は当該の出来事や状態の変化が起こっている状況におかれていなければならないと考えられる。つまり、当該の出来事や状態の変化が起こっている状況におかれているからこそ、「変化のはじまり(開始)」に注目できるのである。

ところが、上の例(9)～例(11)の「結婚する」、「名字が変わる」、「周二が小学生になる」という事柄は、話し手がある時点において「結婚している、名字が変わっている、周二

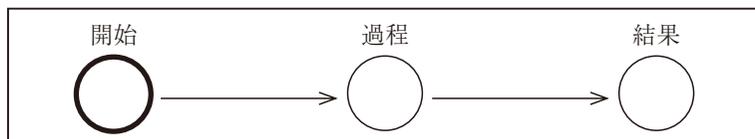
が小学生になっている」という事実をはじめて知ったことを述べている。つまり、話し手が当該の出来事や状態の変化が起こっている状況におかれるということが考えられない。例えば、例(9)の場合、「いつしか」を用いると、「幼なじみの友達と接しているうちに、いつかわからないが結婚していた」というようになってしまう。つまり、友達と接しているのに結婚していることに気づいていないのは普通考えられないということである。

また、例(11)の場合は、「いつからかわからないが、周二に会っているうちに小学生になっていた」というようになってしまう。つまり、普段会っているのに、いつから小学生になったかに気づかないということは普通考えられないのである。

この場合、「いつの間にか」が問題なく用いられるのは、「変化の結果」に注目しているからであると考えられる。なお、例(6)～例(8)において「いつの間にか」が用いられないのは、上でも説明したように、「変化のはじまり」に注目しているからである。

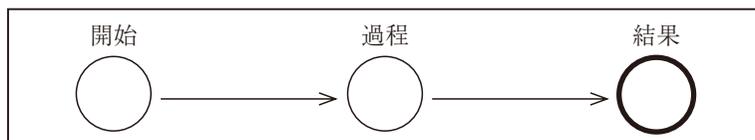
以上のことを図で示すと次のようにまとめられる。

〈図3〉 - 「いつしか」 〈事柄の変化〉



→ 「変化のはじまり (プロフィール)」に注目して述べる場合に用いられる。

〈図4〉 - 「いつの間にか」 〈事柄の変化〉



→ 「変化の結果 (プロフィール)」に注目して述べる場合に用いられる。

ここで、「いつの間にか」と「いつしか」が両方用いられる例を見てみよう。

- (12) 家の前を流れる古田川で今、川一帯を公園化する工事が行われている。かつてはきれいな水が流れ、まさにふるさとのなつかしい川だったが、いつしか (いつの間にか) ゴミがあちこちにたまる川になっていた。(毎日新聞：1992.8.22 朝刊)

まず、「いつしか」を用いた場合は、「いつからかわからないが、ゴミがあちこちにたまる川になっていた」というようにとらえることができる。つまり、「事柄の変化(ペー

ス)」の中で、「開始」の部分がプロファイルされる。

また、上でも説明したように「いつしか」の場合、「変化のはじまり（開始）」に注目できるためには、話し手自身が当該の出来事や状態の変化が起こっている状況におかれていなければならない。従って、「少し注意していたら、いつからゴミがあちこちにたまる川になっていたかということに気づくのは可能だった」というニュアンスがある。

それに対して、「いつの間にか」を用いた場合は、「ある日たまたま川を通して、その時はじめて、かつてきれいだった川がゴミがあちこちにたまる川になっていたことに気づいた」ということになる。つまり、「事柄の変化（ベース）」の中で、「結果」の部分がプロファイルされる。

3.3. 「知らず知らず」と「いつの間にか」

続いて本節では、「知らず知らず」と「いつの間にか」を比較し、相互の意味の類似点・相違点を明らかにする。まず、「知らず知らず」の意味を確認しよう。

- (13) 先ほどとかわらない、静かな声。だが、暖かく優しい、心を包み込む声。織姫の心を安らがせてくれる、声。再び扉から遠ざかる気配。そのかすかな足音を聞きながら、織姫は、知らず知らず微笑を浮かべていた。なぜか、ひどく心が軽くなった気がした。(http://www.campus.ne.jp/~bellring/hoshiori/novel/iris-ori.html)
- (14) いつのまにかテレビのドラマは終わって明るくなっていた。綾子は濡れた髪をバスタオルで拭き始めた。丁寧に手を上下に動かす。がなかなか髪は乾かなかった。今の会話を一度どこかで聞いたことがあるような気がした。その動作をしてるうちに、私は知らず知らず眠り込んでいた。(http://www.cc.osaka-kyoiku.ac.jp/~kokugo/nonami/siori98/98all.html)
- (15) 面白い小説だと、まるでこちらが登場人物になったような気にさせられる。美しい姫君が物思いに沈んでいる情景など読むと、知らず知らず、本当にあることのようにひき入れられてしまったりしてね。(田辺聖子『新源氏物語』：1485)

以上の例は、いずれも、話し手に時間の経過を伴った何らかの「変化」が生じていると言える。また、話し手はその「変化」にまったく気づいていないと言える。例えば、例(13)は「その足音を聞いているうちに、なぜか心が軽くなった気がして、自分も気づかないまま微笑を浮かべていた」というようにとらえることができる。

また、例(14)の場合は「濡れた髪をバスタオルで拭く動作をしているうちに、自分も気づかないまま眠り込んでいた」というように解釈できる。さらに、例(15)の場合は「小説を読んでいて、とても面白い場面が出てくると、気づかないうちに、まるで自

分が登場人物になったような気になって、だんだんその話の中にひき入れられてしまった」というように読みとることができる。

以上のことから、「知らず知らず」は〈話し手によって〉〈主体が〉〈ある行為（あるいは、おかれた状況）から〉〈気づかないまま〉〈別の行為に移る（あるいは、別の状況におかれる）〉〈ととらえられる〉ことを表すと記述できる。

次に、「知らず知らず」と「いつの間にか」の意味の相違点について考察する。

まず、「知らず知らず」を「いつの間にか」で言い換えられない例を見てみよう。

- (16) ぎょっと驚いて今更のように大きく眼を見張った君の前には平地から突然下方に折れ曲った崖の縁が、地球の傷口のように底深い口を開けている。そこに知らず知らず（*いつの間にか）近づいて行きつつあった自分を省みて、君は本能的に身の毛をよだてながら正気になった。（有島武郎『小さき者へ・生れ出づる悩み』：196）
- (17) 根津のうちを追い出された吾一は、どこにも行くところがなかった。彼はちいさい荷物をかかえて、あてどもなく歩いているうちに、いつか忍ばずの池のはたに出てしまったのである。しかし、ここへきたと言ったところで、彼にはべつに、どうするという、あてがあるわけではなかった。知らず知らず（*いつの間にか）、足がこっちへ向いたのは、上野へ行って、あすこから汽車に乗ろうという考えが、心のどっかにあったのかもしれない。（山本周五郎『さぶ』：492）

以上の例において、「知らず知らず」を「いつの間にか」で言い換えられないのは、「知らず知らず」は「話し手が気づかないうちに、自分の行う行為（ある状況）が、別の行為に移る（別の状況におかれる）」という「変化のプロセス」に注目しているのに対して、「いつの間にか」は「変化のプロセス」ではなく、「気づいたらそうになっていた」という「変化の結果」に注目しているからであると考えられる。つまり、例（16）、（17）の場合、「いつの間にか」が用いられないのは、話し手は「そこに近づいて行きつつあった」、「足がこっちへ向いた」という行った行為の変化の結果に注目しているのではなく、気がつかないまま「そこに近づいて行く」、「足がこっちへ向く」という行為の変化のプロセスに注目して述べていると考えられるからである。

今度は逆に、「いつの間にか」を「知らず知らず」で言い換えられない例を見てみよう。

- (18) その日、昼夜のコンサートを終え、うきうきと帰宅した私の目に映ったものは、一人の飢えた男性でした。まるで中国を恋しがっているランランのようなうつろな目をし、私の帰りを待っていました。いつの間にか（*知らず知らず）私は、すっ

かり夫不孝の妻になっていたのです。

(http://www.fsinet.or.jp/~nso/nso_news08.html)

- (19) 呆然としたまま電車を乗り継ぎ、いつの間にか (*知らず知らず) 私は故郷にたどりついていた。(<http://www.freepage.total.co.jp/sylvie/real-bn.htm>)

以上の例において、「知らず知らず」が用いられないのは、「自分も気がつかないうちにだんだん夫不孝の妻になっていく」、「自分も気がつかないうちにだんだん故郷にたどりついていく」というような変化のプロセスに注目しているのではなく、「気がついたら、すっかり夫不孝の妻になっていた」、「気がついたら、もう故郷にたどりついていた」というように、変化の結果に注目して述べていると考えられるからである。

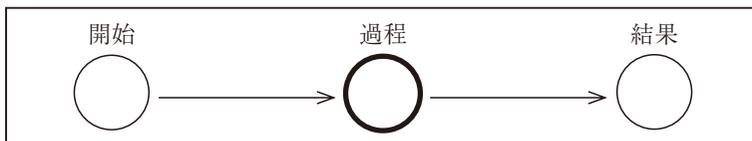
また、「いつの間にか」は下の例 (20)、(21) のように、話し手のかかわらない客観的な事柄を表す場合にも用いることができる。「知らず知らず」はこのような文には用いられない。

- (20) ノリをつけようとする、ナベの中に煮ておいたものが、いつの間にか (*知らず知らず) 凍っていた。(山本周五郎『さぶ』: 215)

- (21) さっきまで降っていた雨はいつの間にか (*知らず知らず) やんでいた。

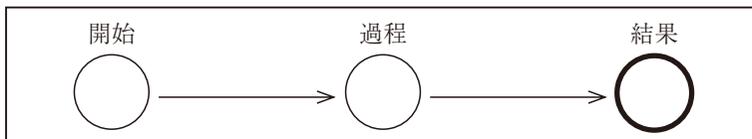
以上、「知らず知らず」と「いつの間にか」の相違点について見てきたが、このことを図で示すと次のようにまとめられる。

〈図 5〉 - 「知らず知らず」 〈事柄の変化〉



→ 「変化の過程 (プロフィール)」に注目して述べる場合に用いられる。

〈図 6 (=4)〉 - 「いつの間にか」 〈事柄の変化〉



→ 「変化の結果 (プロフィール)」に注目して述べる場合に用いられる。

続いて、「知らず知らず」と「いつの間にか」が両方用いられる例を見てみよう。

- (22) 面白い小説だと、まるでこちらが登場人物になったような気にさせられる。美しい姫君が物思いに沈んでいる情景など読むと、知らず知らず (いつの間にか)、本当にあることのようにひき入れられてしまったりしてね。(例(15)を再掲)

上の例は「知らず知らず」を「いつの間にか」で言い換えられる。意味の差はほとんどないが、ニュアンスの違いとして、「知らず知らず」を用いた場合は「小説を読んでいて、とても面白い場面が出てくると、気づかないうちに、まるで自分が登場人物になったような気になって、だんだんその話の中にひき入れられてしまう」というように読みとることができる。つまり、変化の過程(プロセス)がプロファイルされる。

それに対して「いつの間にか」を用いた場合は「小説を読んでいて、気がついたら、自分が登場人物になったような気になって、その話の中にひき入れられてしまっていた」というように、変化の結果がプロファイルされる。

4. まとめ

以上、本稿では「いつしか」「知らず知らず」「いつの間にか」を取りあげ、認知言語学の枠組みから相互の意味の類似点・相違点を明らかにした。以下、分析結果を簡単にまとめておく。

まず、各語の個別の意味の分析結果をまとめると次のようになる。

「いつしか」

〈話し手によって〉〈主体が〉〈ある出来事や状態の〉〈変化のはじまりに気づいていない〉〈ととらえられる〉ことを表す。

「知らず知らず(に)」

〈話し手によって〉〈主体が〉〈ある行為(あるいは、おかれた状況)から〉〈気づかないまま〉〈別の行為に移る(あるいは、別の状況におかれる)〉〈ととらえられる〉ことを表す。

「いつの間にか」

〈話し手によって〉〈主体が〉〈気づかないうちに〉〈ある出来事や状態が変化していた〉〈ととらえられる〉ことを表す。

次に、各語の相互の意味の類似点・相違点については、以下のようにまとめられる。

「類似点 (同一のベース)」

〈話し手がある事柄の変化に気づかない〉

「相違点 (プロファイルの違い)」

「いつしか」→「変化のはじまり (開始)」に注目して述べる場合に用いられる。

「知らず知らず」→「変化の過程 (プロセス)」に注目して述べる場合に用いられる。

「いつの間にか」→「変化の結果」に注目して述べる場合に用いられる。

注

注1 河上 (1996) は「カテゴリー化」について次のように述べている。

私たちは日常生活において、様々な事物を知覚し、経験する。その量は膨大なものであり、一つ一つを記憶にとどめようとする大変なことになる。しかし、私たちはそれらの事物を効率的にグループ分けすることができる。つまり私たちには、事物から何らかの類似性や一般性を抽出することで、事物間にあるまとまりを認識し分類することのできる能力が備わっていると考えられる。このような事物をグループにまとめる認識上のプロセスを、一般的にカテゴリー化という。(河上 (1996: 27))

また、言語の様々な側面に関するカテゴリー化の問題について、プロトタイプ論の見方を採用したことを認知言語学の根幹をなす特徴の一つとしてあげている。

さらに、プロトタイプを「カテゴリーの成員の中でもより中心的で、そのカテゴリーを代表すると思われるもの (河上 (1996: 209))」と定義した上で、次のように述べている。

そして私たちが事物をカテゴリー化する場合、そのプロトタイプを核とし、その周りにさまざまな成員を位置づけることで、全体を構造化しているとみなす。この考えに基づけば、カテゴリーの成員は、その成員らしさという点では一様ではなく、中にはプロトタイプに近いものもあれば、それとはかけ離れた周辺のものがあったり、成員間で段階性がみられることになる。(河上 (1996: 32))

注2 李 (2005) は、本稿で扱うものと同じタイプの類義表現として「思わず」と「つい」を分析している。また、「プロファイルは同一であるが、ベースは異なる」ものとして「うっかり (と)」と「うかつに」を取りあげ、分析している。

注3 本稿は、李 (2001) を認知言語学の枠組みから分析し直したものである。

参考文献

- 李 澤熊 (2001) 「副詞 (的機能を持つ表現) の意味分析 - 思わず, 無意識に, 我知らず, 知らず知らず, いつの間にか, いつしか -」, 『日本語教育論集 世界の日本語教育』 第 11 号, 国際交流基金, pp. 179-193.
- 李 澤熊 (2005) 「非意図的であることを表す副詞の意味分析」, 『日本認知言語学会論文集』 第 5 卷, 日本認知言語学会, pp. 588-591.
- 河上誓作 (1996) 『認知言語学の基礎』, 研究社出版.
- 辻 幸夫 (2002) 『認知言語学 キーワード事典』, 研究社.
- 初山洋介 (2005) 「類義表現の体系的分類」, 『日本認知言語学会論文集』 第 5 卷, 日本認知言語学会, pp. 579-583.
- Langacker, R. W. (1987) *Foundations of Cognitive Grammar Vol. 1*, Stanford: Stanford University Press.
- Langacker, R. W. (1988) "A View of Linguistic Semantics." In Brygida Rudzka-Ostyn, ed., *Topics in Cognitive Linguistics*. pp. 49-90. Amsterdam: John Benjamins.

例文出典

- (1) CD-ROM 版『毎日新聞 ('91-'96)』.
- (2) CD-ROM 版『新潮文庫の 100 冊』(1995).
- (3) 検索エンジン goo (<http://www.goo.ne.jp>).
- (4) 青空文庫検索ページ (<http://www.jca.apc.org/~earthian/aozora/llsearch.html>).